里見八犬傳 拾一編 卷十四

709
62

曲亭馬琴著

八犬傳

東京名山閣版

遠13
門
709
巻62

明治三六年十月九日 購求

第十一輯

南總里見八犬傳第九輯下帙之上附言

有人云在昔里見氏ハ安房ヲ起リテ後ヲ上總ヲ略シ又下總ヲモ半分討從フ況有

低バ安房ハ小國ナレドモ其發迹ノ地ナルヨリ今モ世ノ人推並テ安房ノ里見トスルハ如何

然ルニ更ハ這書ヲ名ツケテ南總里見トモ便是本ヲ捨テ只その末ヲ取ルヲ似タリ故ある歟

いふそやと詰問れ予答て云否子ガ今論ずるハ後の稱呼ヲ從ふのミ上れる代の制度ヲ考

るに安房ハ素是總國の郡名ノ號古天富命更求沃壤分阿波齋部率

往東土播殖麻穀好麻所生故謂之總國古語麻謂之總也今為

阿波忌部所居便名安房郡國是也

景行紀ニ東の淡水門を定めのたまふ亡語拾遺ニ見古事記並ニ書紀

ぬしく淡水門を渡りのたまふ元正天皇の養老二年五月乙未上總國を

ハ平群安房朝夷長狹四郡を割く安房國を置ぬ聖武天皇の天平十二年十二

月丙戌安房國と元のごく上總國ふ并せゆ亡ぬかくて　孝謙天皇の天平寶字元年五月乙卯安房國舊ふ依ゝ分立らるゝよゝ書紀及續紀ふそえ引よりゝ後い安房と上總と二國さるふ論ゆゝさぐと安房も初い總國へ當時里見氏の威德と思料るふ辻人相傳へてその封域といへる者二百三十七萬石とも房總志料第五巻安房の附錄ふ是を不ロゝく里見九代記ふ據るふ里見の領地い義堯より義弘へ傳へ所安房上總並ふ下總半國是ふ加るふ三浦四十餘郷あり此彼を合ゆても七十萬石ふ尚充ざるへ亡ふ土人の口碑ふ傳る所ハ何ぞふ本つ亡ゝいるふ狹といへ縱七十萬石ふ充ぎとも大諸侯と稱まるふ足れり然れば起本の國とらゆともかくの如ク小說ふ編小の安房とりゝ里見の二字ふ冠せゝ亡ゝ沙りとて又房總と倡へ亡ゝ三浦四十餘郷あり因て南總とふ統いその地廣大ふ相聞えそ唯上總ふのみ限るふあらぎ這書ふ載ゆる里見父子ハ賢明當時ふ雄れば南方藩屏第一の大諸侯と仰よゝと看官ふもあのハせんとも作者の嗣意素よりかくの如ク知ぎ僻言ゆゝんかも。

本傳第九輯ハ初の腹稿より巻の數いとヨヘくゝるとりゝ第九十二回より第百三回まぐの六巻と九輯の上帙と。第百四回より第百十五回までの七巻と中帙の上下と。今板第百十六回より第百二十五回まぐの五巻と下帙の上とも是より下ゆも尚物語ヨヌれば亦復十巻と両箇ふ釐て下帙の中下帙の下とて明年二度ふ續出べし。八犬士及八犬女の端像（俗ハ是を口画と云）ハ第二輯三輯より冉々ふ是を出して今ハ遺漏ゆといへども或ハ総角の折の次女と寫し或ハ微賤の折の趣ゆくゝのまぐ其真面目とえも仰ふ足らねば今又あゝ是を出せり者ゝ仰も惟伏姫い生前死後の神體まで曩ふ端像ふ出ぎゝ亡ゝ茲ふ省ゆゝ七犬女と重出まぐ中ふ濱路沼蘭雛衣ハ既ふ鬼籍ふ入られ。その墨色と異ふあて繡像同ドからぢらしむ又彼神女の贊詞の如ク琴籟君子の麗藻あり因て、大と贊ゆる五絶と倶ふ亦簡端の餘紙ふ錄しつ

天保七年丙申秋九月下澣立冬後の一日　蓑笠漁隱識

南總里見八犬傳第九輯下套上總目録 九集第三版

巻第十三之四
第百十六回 賢士重知犬士 政木筆詳政木
第百十七回 恩化龍示升天 答問津犬童惱風濤

巻第十五
第百十八回 兩國河原南客逢北人 千千三畷師弟屠蕪媽
第百十九回 說來路次團太附驥尾 盡餘談親兵衛促扁舟

巻第
第百二十回 傳命令使臣正征伐 贔一巢窮士償前怨

十六
第百廿一回 天資神祐擘石門牢戶 犬江親兵衛破魔夷賊

巻第十七
第百廿二回 讓勲功親兵衛赴法會 後賞禄安房侯温寒鄉
第百廿三回 小乘樓一僕謁故主 大庵十僧資法筵

巻第十八
第百廿四回 守師命星額瀆遺骨 受殘捨腐僧告禍鬼
第百廿五回 逸疋寺德用與二三士謀 退職院末得名詮諫不得

八犬傳第九輯下套上目録終 下套中下二帙陸續刊行

幼稚養村荘義心凌毒ヲ在泥不染
泥市上耀人口　賛大川義任
依義失雙實
遂霊全両英
誰知仙境住
花樹受恩栄
賛音音
音音
犬川義任

磨劍不忘親寛仁王
佐器堂堂好男子到
虎伏鮮吏
賛犬塚戌孝
寒蟬懸蟷網新月落
圓陵霞託同名女貞
竟結赤縄
賛濱路
前後両濱路
犬塚戌孝

赳赳忠義子積年凌百憂
英風誰敢敵一箭貫金兜
憂姿知幾處智勇最
冠州牛閣返重恨鈴
森討久讐 賛犬山
忠與犬阪亂智
犬山忠與
犬阪亂智

犬飼信道
劍法抜東一勇威
不可當拾殿庚申
嶺補孝赤岳郷
賛犬飼信道
一時離而羽恩惠
六年間歡喜且憂
苦共維倚富山
賛妙真
戸山妙真

沼蔭

一拳撲野豬雙手
駐物折謙遜不曾
誇其名轟世界
賛犬田悌順

心血成良藥眼前救一雄悲風花落
處不料得神童　賛沼蔭

犬田悌順

山林人

駄馬倒山路姉妹咫尺間
若非神妙助爭得到仙寰

仙山洞窟姉妹
徑見亡父姉妹
依神助相俱歸
高雄寺單節
園

十條力二郎

由子
ひくて

單節
ひとよ

十條尺八

及時開左手
神助免危窮
六藏富山住
幼拳救老侯
犬江仁
いぬえまさ

犬村礼儀
いぬむらのり
一朝遇謗疑薄命無由赦
伏劍顯貞心走珠殲猛獸
賛雛衣
雛衣
ひなころも
仰信
寺神

南總里見八犬傳第九輯巻十三之十四

東都　曲亭主人編次

第百十六回　賢士重く犬士を知る　政木肇て政木と詳ます

再説犬江親兵衛仁は尺寸も足らぬ鐵扇とのそ河鯉佐太郎孝嗣が最も劇しく毅ち又尖と受流し相拄えず挑戰ふ至妙の武藝ふ孝嗣秘術と盡せども毫も透さるるぎりなく憶ずも聲を被て曰よや少年姑且待ね問ふとありと叫びて身を跳らして圈絶の外に退き端を定めて刃を鞘ふ斂まば親兵衛莞爾と笑て思ふ優る和殿の大刀筋何とぞ雄と決せざると問ひ久されてはまばとよ剏和殿の為体人を揣りて貨財を奪ふ騙児るに非ず必是向馬前刀徑を事とせる又那麻生の松孺の亞流るんとおのふとのそ毅を果さずく欲せ不勝力凡庸ずもせ七矢庭ふ我身を擻抓ふ投石ふ今一支の勢ひ世ふ炒える村上義

光妻鹿孫三郎へもそもいかホーく及ぶべき。加旗武藝精妙絶々數寸の扇子をもて我大刀風を
扇返さぬ。神術奇特のそが上ホ奇シハ和殿の懐より一道の光明赫奕と閃き出て散徹
ありぬ。只我眼を遮りしかバ。など朽惜くも腕児在ひて。大刀筋安定ならざれバ心驚き訝しけれバ。
恁ハ刀を歇めて。意ホ和殿ハ人倫ならで。郷ホ我死を救ひぬる箙の刀自の等類歟。獲者の化
現欤狐狸妖怪欤惑ひを解ざる甚麽ぞやと問へバ親兵衛うち領きて。その疑ひハ然ることながら。
酒家ハ妖怪変化ならず。実を諦せバ和殿ホ等しき窮達不定の孤客遠頭を遊歴ある者の
なり我名ハいまだ知れずや酒家ハ和殿が相識なる毛野道節們の七犬士と同因果の義兄弟
犬江親兵衛仁と喚做も今兹九歳の総角なれども童年才ホ四の秋より伏姫神の擁
護ホより安房なる富山の神崫ホ人と成りホ甲斐あり心術さへ身長さへ見るを像く大人
備て。文学武藝も姫神ホ傳授せられて。然なりの本事なきにあらねバや料らずもいぬ隊比
世ホ復出べき時を得て。國主御父子の奉為ホ寇を夷げ敵を降ぎし。その功をもて寵用せら

れて上總なる舘山の城をさへ預けられしに故ある事ありて幾日もあらで君のおん覚妙なれバ自
餘の犬士の在処を索ねて一個も遺さず領て来よとて猛可ホ身の暇を賜りぬ我も亦同因
果の義兄弟ホ先だちて単國主ホ仕るハ本意ならぬどのミ思ひしかバ一議ホ及ばず領掌なしつ
つ伴当とてハ一個も倶せず發市へとて赴く程ホ則一月の旅なりけれバ。しも這頭へ来ホけれバ郷ホ
上野の松蔭なる茶店ホ一霎時立寄て路の疲労を憩へてありしホ里人なるべし群立走てぞ
前面岡ゆて頭を斬なる那罪人をいで見んとて慌しく相罵るをききて思ひしかバ茶
店の老媼ホ所以を問ひしホ老媼の答の詳ホて刃忍図なる城内の機密を遺さず告られけり。
然らでも酒家富山ゆて伏姫神の示現ホより和殿親子の忠誠孝義を知るところあり さ
すれバ今又老媼が答所よく具なりしかバ酒家悄地ホ思ふやう那孝嗣が忠孝なる畳巣ホ高
暇の對陣ホ道節毛野們感嘆しつ刃を交さで相別れぬと傳聞しホ概しや佞人們ホ誣ら
れて罪なき罪ホ命を殞さん欲するを憐むホ猶餘りあり非如我這身ひとりホて其死を拯ひぬ

かくとも刀く首級を奪ひ奪ふく選佛場へ葬らんあも亦武士の情ふそと手厚く遷
ゆくそゞ儘茶店と立去りく前面岡ふ来く相まゝ既ふ刑伐の折と聞くて和殿と布草の
上ふ乗居るそゞ身邊ふ実検使あり並ふ大刀奪の武士もあり他們ハ老媼ふ少知
なる刃心岡の城の頭人根角谷中二頭鹿廉と宛栗專作るべゝと猜せるまの餘幾十
個の雑兵四下と守護く專非常と警めるる後方ハ連る岡ふく樹柱隙るる戍卒
あゝねば件の樹蔭ふ身と潜しと事の容子と偷看在りゝふ覩目不樂ゝ和殿の終
焉日刃既ふ頭上ふ莅めば胸裏ふ胆冷て揉ハ術もるふ折くく章ハるる越路より長
尾家の老夫人當所へ發向の竹えあり奪輿子と寄られて遂ふ和殿を救ひ奪りぬる
理非明辨の談精妙驚奇雀躍愉快の光景汐くふ時宜ふ在りゝくる麗廉
ら們ハ咸退ふ去りて那大刀自ハ両刀を和殿ふ含るゝの公風と覩ゝハ怪ゝや幻ゝそ其里ふ在
ゝる簸大刀自最ヨヨるける伴當さへ瞬息間ふ在くぞ寄ぬる事の奇魂ふ匂月潰

まく出もふ毛ふ窮覩ゝふ和殿も酷く驚ふ慌くく慌と單語く且涙草の方へそく
快立去まくせくれ程ふ洒家悄地ふ思ふ奪ふ那孝嗣ハ智勇の健雄毛野道節們
と相識る親子の忠誠その甲斐もるく僅ふ死罪と免れて萍跡浮浪の人とるりゝと
我君侯ふ薦めまるく里見の家臣ふ做まるゞ萬卒ふ倍く憑ゝかく人るまども
ゆまゞ本事と知らゞ錐ゝくそと尋思とまく和殿ふ先ゞち間道より悄地ふ走りて
這里ふ在り像の如くふ討較く聊試くたりけるふ倘九庸の浪人るゝゞ我懐るる
財嚢と相く正るゞ心を發ゞゞ死ふ一所不住の浮浪の其身ふ鏹一文の盤纏る
けれど然るとゆハ揖念せゞ洒家と路ふ倒れる病者るゝんと憐ゝ思ひて喚活ても
るゞ届くゞゞ介保せんとくるを揖られ清白仁慈の心操君子るりゝと知るゞゞ武
藝の利鈍を揚ん為ふ陽瞋るくるを下ゞふ投られるゞゞ跌ゞ倒れゞゞ刃を拔
見光ゆゝゝ毀る果さんとく挑るける大刀筋都く法ふ稱ひて一人當千の段るゞふ

あるに武藝の程を知る上八里見殿へ汲引せん外を求るとゝ意衷を告て慰れば孝嗣深く感佩しく然ゞと大々るゝを四下と乞ゝ聲を悄めて原来和殿八大阪付那七勇士と云伯因ある大江生でありけるよゝる那人々い義兄弟八名あると呼ゝかゞ高畷の對陣ゞ大塚生ゝ虧れば和殿の上八少知らぬりゝふ神の擁護ふ霊山ふて生育ゞ紀と少く間ふ思ゝ合ゝる奇特い覿面今茲九歳の総角ゝと誰ゝ知るゞ紀身長さ八心術さへ大人備て智略勇力武藝まゞ現神々ゝ奇雋尚傑今昔ゝ雙とゝいゞ紀神霊佑授の大刀筋ゝゝ敵ゝかゝゝも然ゝとゝゝ方僅刃と合せゝ折奇ゝ紀い和殿の懐ゝゝ光と發ち粲然と我面を撻ける八必是所以あるべゝと云ふと親兵衛ゝち听ゝその疑ひ鮮易ゝゝ我黨ゝる八犬士八自然と獲ゝる霊玉ありその八顆の玉毎ふ仁義礼智忠信孝悌這八行の文一字ゝあり天造地作の宝貝ふあるれが厄と釋ゝ難と征まる第一の身の衛られふ優ゝるゝ就中我持る玉ゝ仁の一字あり仁と名告るゝこれふ由れり量衷ふ富山と云ゝ

折獨館山の城ふ赴ゝく逆將蟇田素藤と生拘ゝ凶徒を降ゝ城と拔ゝ我霊玉の威徳ふよれり信れば和殿と挑ゝ折も自然と光と發ちゝ遮莫館山の城ゞありゝゝ那兄黨ゞ降伏の為体と告るふゝ遑ゝで言詳ゝゝ信れゝゝ思ゝれゝ又只我上のゝゝ七犬士ゝゝ才幹言行安房侯老侯御父子の明徳賢と愛ゝ民を極善政憑ゝ施ゝふ賢君良佐の事の崖略伏姫神の霊験威徳の世ふ復ゝゝ紀奇談ゝゝ鮮示さゝく思ゝゝ這里八久恋の園ふゝゝ卒ゝ上野の原ゝゝ退紀て迭ふ意衷と盡ゝべゝとゝふふ孝嗣再説ふ覃ゞゞ現ゝゝれゝゝその理あり物蔭ゝ紀這池畔ふく長譚ふ時を移さば谷中二仏ゞ稍醒ゝ立かゝ来ば爭何ゝせん非如そのゝゝ紀ゝゝ忍岡ゝゝ遠ゝゝ一歩ゝ快退くゝ上策とゝゝ卒ゝくゝゝ連立ゝ上野の原ふ来ふければ親兵衛遥ふ指ゝゝ河鯉生よ那ゝゝ那老松を片食ゝゝ建ゝふ葭簀を折遠ゝゝゝ八鶯ふ我憩ゝゝ老媼の茶店で休ゝゝふ和殿の身の皮八囚牢衣ゝ去向の

外視宜かるべし。今日は殊ぢう温暖るれば我下衣は一箇脱く。裏て腰ぬ纏るあり。且那里へ立よりてあをまるくせん被ぬいぎぞ。とふを孝嗣そうへらく。そも又汝くこそ好意ろう。知己の隨意せざるんや。と敬び答く共侶ぬ件の茶店ぬ来くれば。密の蒼柴垣ぬ立ども何地ぬ紀けん老媼ぬ在るぞ。然びとく茲より外ぬ亦認ふべ紀家ぬるを。一霎時等るぞかく来てん。と思へば両個の後生ぬそぶ儘裏面ぬ入る折ぬ茶ぬも鼓簧を掖達らるく外視て憚る目柴ぬ来る。俱ぬ茶を汲ぬうち喫く親兵衛は腰ぬ附る袱裏そうち被て衣を拿ぬて孝嗣は卒とそ遞與せば孝嗣は受合るうち戴ぬるを上は襲被く。身装をあられども。あるぬの老媼のまぞ選られば。そぶ儘発児ぬ尻を抵て親兵衛と俱ぬ認ひく在り。登時犬江親兵衛は孝嗣ぬうち向ひく。鄭ぬ話ぬ漏ぬたるその身の禍福伏姫神の寓助撫育并ぬ姥雪老夫婦曳ぬ単節母子の事及七犬士の事の趣は曩ぬ姫神ぬ告られく。聞ぬ隨ぬ一事も省るぞ。且里見殿父子の賢明四家老諸勇臣の行状得失

素藤が叛逆の顛末までその要を演敏繁と甘ぞ。箇様々々と悄語ぬ示せば。孝嗣は聞ぬ毎ぬ連りは感嘆の聲を沼断ぞ。憶ぞも大息を吻く。連愛ぬ紀諸犬士の孝義英才始は在下。君父の與は犬阪生を恨ぞ。ぬその僻事ぞと怪りーより更ぬ捨ぐ紀思ひあり。

別今又その義兄弟。犬江和殿ぬ鮮迫ーてその身の資助ぬるぬは過世ぬ欲宜ぬ奇ぬう。恁ぞく八個ぬうち揃ひる隼門傑連は宿縁ぬく。君臣の義は結ぐ世ぬく。里見殿両侯の年来の徳澤仁政聞く示沼ぬ紀名将ぬるぬ義むべーぬ。と只管嘆賞ぞ紀れば。親兵衛は鄭ぬ聲を情めて。鄭ぬも既ぬ知ぬけーー我君侯は賢を招紀士ぬ下りぬつをぬく。老殿ぬ時より蜜崎十一郎照文と。嗣は做ぞ家臣を関八州へ遣ーて智勇全備の士を求く招ーぬ紀その折大塚犬飼大田は下総ぬる行徳ぬく。大法師と十一郎は思ひけ今ぬ相遇ぬて。里見殿の息女ぬりけ。伏姫上は犬士ぬ與ぬる過世の母ぞとうはぬ紀料ぞも暁得ぬる首ぞ紀ば徒ぞ。ぞとそ八房の犬の事。金碗入道、犬の事。及親兵衛が三親の義侠横死の事までも詞意迫

あく解示せば孝嗣ハいく感嘆して咱們扇谷家に在りし日ハ奸黨に仇とし忘れて一個も知音の友なかりしに高畷の軍陣より犬阪犬山両勇士の意衷を始て听しより寃家なからも心ハ似たる知己人けりと思ひしに今又和殿の話説を凡人ならぬを知るに足れりその水原に尋れバ姫神孝義の英烈より自然と生れる八個の豪傑里見に出て里見に仕る宿因定ま差次で安房ハ四郡に過ざれども偉なる哉造化の妙功八顆の霊玉八個の良臣身を護り君を補佐して武威八方に赫奕ん久後までもいと憑し感心の外はなしと繰返し彦心の誠ある親兵衛さへそ慰めて優思れるハ他を求めず里見殿に仕ねべし酒家一尺の書をまゐらせん和殿を薦めまうしなバ必登用せらるべし安房へ赴ねかしといふに孝嗣沈吟じてそハ然ることながら非如不徳の君とても扇谷家ハ父祖の時より恩顧重代の主君なりしに今日死刑を免れたりとそけふより他姓に仕ふるハ忍びざる所あり願くハ和殿の従者と做りてその技を伴れ犬阪犬山自餘七個の犬士達に對面して和殿と倶に那人々の安房に参りて仕る後まで車ひかせて棄られても我身吹風に

預らバそれも左も右も杳意に依らん目今従ひまうさんと答を折りて覚然と定方を投て来る者あり此ハ是別人ならず定茶店の老媼なりけれバ孝嗣が引挽らしてゐる葭簀を推啓て我入るに親兵衛們を見て合笑を揖讓して郎君前面岡より剛才なく来ませし欲奴家ハ所要のありて喚れて宿所へ走りかへり程店うち空くなりしにお好みせしもたれ兄連さるも茶を召れし欲先沸らしてまゐらせんとて吹筒を抗て埋火撥て吹起せバ竈本の煙立昇る霧の離笆に白菊の衰ひ見えて風情ある老媼を孝嗣ハつくづくと相て親兵衛が袂を按て犬江主那と見るやと那老媼が面影ハ衛に我が必死を救ひし假大刀自によく肖たり倘その人にもやとうち耳語て指さし示せバ親兵衛も稍心つきて現にみれバ聲音まで毫も錯ぬ定に似たり故あるべしと奇と潜語て数年の遂なくけん老媼ハ徐にかへりて刀袮違なきまでに許りある前面岡まで河鯉主の危き命を拯ひし別人ならで奴家ハ徐に立よりて孝嗣も親兵衛も胸を潰しつゝさそれと向ひて呆れて眞も長視て在り　と老媼ハさそと微笑て

犬江主ハけふ遺際の初對面でゐる間知らせぬ為ハ理の人河鯉腹子ハ名ばかりたも听知りてゐさ
ぎ奴家ハ政木でゐるか。と名告れど孝嗣ゐるゐぎ作麼政木ハ誰ぞ。と問ハ問ハ
近つ兒発児ハ尻とうち撫て原来忘れぬ。欲然ゝ具ハ告まゐらん犬江主も听ゐ給ふ喃和子
思ひ出ゐるぞ。奴家ハ女身の後の姨母後の政木でゐるか。とハ孝嗣ゐ恐く悟りて原来我総
角の比大人の夜話ハ伝ゐる故ゐ影と躯ぎ姨母政木ハ作欲ぎ。什麼思ひ出ゐ再會
ゐるぞとハ訝る親兵衛ハ我姓名を知られゐるゐも亦奇とぞゐ口を鉗て听ぎ法當下政木ハ
黙頭ゐ又孝嗣ハゐ向ひ。やよ喃和子這回奴家ゐ女身を救ゐ事の情を今ゐハ説明さんハ
恥ぎ面ゐ所ゐで侍れども女身の未生以前より奴家ハ忍岡の城内ハ牝牡栖馴ゐる野狐と
ぎハ。女身の年二才の比奴家ハ有身ゐ。とゐ。ぎ女身の父ゐ權佐守如大人ハ素より
忠義の士ぞ。當時忍岡の城預の頭人でとゐ。ぎ那城内ハ在ゐ。又女身の奶々も慈悲深
く物を憐む本性ゐれば。と憑ぎ思ふ間奴家牝牡ハ其ハ家ハ寓来て箕子の下ハ栖れと人ハ見

られぎ知れもせぬ奴家ハ开里ぞ子と産ぎ。その時又河鯉腹家の若黨ハ椹田和奈三と喚做まゐ。
その性酷く残刻ぞ。殺生を好ゐ。ぎその年女身の父ゐ守如大人ハ君命ゐ。京都將軍家へ
ぎ使ハ立ぬ。ぎハ那和奈三ハ政木と喚做ぎ女身の姨母と幾の間ハ密通ぞ。ぎ折
病ハ推て主の伴ぎ立ぎ。ぎ程ゐ我雄狐ハ奴家ゐ與ハ食物を求ハ夜々外ハ出ぎハ有一日
件の和奈三ハ釣漁の地龍と出合ゐ。ぎ心とゐ。ぎ庭ハ印ぎ。狐の足跡と見出ぎ。這足
跡ハ猫より大ぎく狗よりハ亦像小ぎ這頭ゐ狐の穴ゐ。ぎ開ぎ通ぎ路ぎ。ぎ尋
思ぎ。ぎその日の夕欲暮ぎ麻油ゐ熬ぎ甲夜ゐ庭ハ弦を椹ぎハ我雄狐これを相て弦
けり。と知ゐ。ぎ畜生の悲ぎハ。その香ハ掖ぎ心怨ぎ。ぎ終ハ弦ハ椹
られぎ。命を开里ゐ頸ぎけり。ぎ程ハ椹田和奈三ハ揣ぎ。ぎ狐を合ぎ獲て。その穴をうち啖ぎ
皮を售れども飽ぎ。ぎ狐の穴のあべ。ぎ悄々ハ未獵る程ハ我子狐の穴ハ在ぎ鳴聲を
洩ぎ。ぎて原来ぎの箕子の下ハ栖る狐の穴ハ在ぎ。獵出ぎ射て合ぎ。ぎと罵ぎ噪ぎて准

備を設るもあん身の奶々の告知りぬひくうち驚沼を和奈三と召よせそよと問ゆへ和奈
三悪もとゝ沼ぞいふる夜庭ふ弥を措て箕子の下ふ栖ふる。牡狐を捉獲る支の趣を
招きければ奶々いふく腹立ぬひてそを軽〻敷曲事〻我良人ハ性とし〻慈心善と旨とし
ぬへば最介る虫ゝとも故ふく殺しぬふとあ〻況當所の鎮守の神い妻恋稲荷也御
座せば狐ハ要ある獣へ且その狐を捉りし宵ハ河鯉氏の先祖の忌日の逮夜ふも丁まるふ箕
子の下ふ栖る狐のありと知りく主ハ告げ給恣る殺生ハ言語同断とらひつべし。折〻我良人ゝ
京上りの留守ふ一家児ゝる僕従のゆる歪支を考と禀さび家を守まる我怠慢そと發
憤らせぬいるん。悠る鳥許の没黒児ハ今よりの後使ひくさかり大爺のかへ〻せぬふ日ハ速ふ下
宿し慎く沙汰と答べ〻と思ふの隨ふ叱り懲〻し七子舎ふ退け屏居ら〻く和奈三ゞ保人
某甲と召寄〻て仔細と示〻て那身と預け遣しぬる悠り程ふ丸身の奶々ハ奴家母
子と憐ぬひて這城内ふハ岡もあり林もあるふその狐の牝牡ふの家の箕子の下ふ栖ひ所

以ふ牡狐ハ毎慙の人のゆふ捕られく可惜命を殞しなり。牡狐のゝぞるゆれば。その牝狐ハ子と養
ふよさそを便るく哀〻ぬ日毎ふ食と與へよとく心術素直る。奴婢ふ悠々と吩咐く或ハ
餅赤豆飯油熬ハの豆腐鱚魚るゝどを箕子の下ふ措しぬそ旦夕ふ賜ひ〻ぶ奴家ハ夜ゑく
外ふ出て求食るふ及ばぬ飽まぞよ乳汁も卓ふ散ん〻ければ子と養ふよ便りを沼るも皆足奶々の
御恩ふ侍れば〻と森く恩ふも恨ゆ〻ハ只和奈三のゝ然れとも他ハ心猛く残忍姦慙の暴
男ゝれゞ食る術く命を果さん術と施せべくもあらぞ。誰何せまゝと思ひ不娯〻四五十日と歴ふ
程ふ守如大人ハ恙ゝく華夏よりかへ〻まゝて返命をまゝ〻ぬひあん身の奶々ハあの折ふ
椹田和奈三ゞ事の趣を守如大人ふ報ぬひ〻ぶ。大人ハ听〻點頭く和奈三ハ譜第ふあ
らぞ。その心術良〻ねば身の暇と取〻せんと思ひ〻沼果さゞを惜ひ〻ぶ者ゆぞ〻ぞ〻く預置
せ和奈三ゞ保人を召〻せく。家風ふ背ゝ他ゞ越度と悠〻と吩え知らし七那身の暇と
取ら〻ぬひ悠而又日數と歴く我子ハ既ふ乳を離れて稍大ゝく〻ゝ他の野山へ遣

○文溪堂藏

文溪堂藏

あく。身単故の宛ふ在り。恁〻程ふ和奈三六主家ふ在りまるり。より。情慾の多る方る
けれ。悄地ふ政木ふ艶翰とをり〻。諜〻合ふ夜ふ紛まそ。誘引出して走らふけり。朋輩の
奴婢們ぞふ開と知れるめをり〻ふ奴家をりふ豫より。恁らんと猜ったり。這時慾と復さ
ま。ふ孰の時を期ま。紫と思へ當晩和奈三と政木ら迹を跟て行〻ふ千住より去向遠〻
竹塚の邊ふ和奈三ら乾小父の莊客あり。那里と憑まく。姑且の身の躯処ふまべ〻と。開
方と投くいそぐ〻を奴家途ふく迷〻〻。瀧野川村へ掖て来つ左右間ふ細路を奴家ハ
剪徑の山豪ふ化て他們ら前後より両個とをまく〻立顕れ盤纏と遽與せと。喚被々々
引拔。紀諢き刀の光ふ和奈三政木ハ吐嗟と叫びく。路と討めく〻逃んと〻る。歩下暗ふ篠原
折〻る月ハ雲ふ没て黒白と別ふ男女ひとく〻急流名高る石神川の岸踏崩〻。滾落く。
浮つ沈〻る流れ〻ら俱ふ溺れて死ふけり。恁てそ奴家ハ月屬の怨と復まとと泣く。心ふ
快る〻かも。政木ら在〻ま〻る〻より。生〻紀姫母と隷〻まるら。和子ハ心面嫌ひあてその

乳を輒く喫めハ。然〻ら和子の父貪嬢の心苦〻くあやをく。是より五朔の病るとも引も出
さら爭何ハせん和子の奴々のあん好意を我子ハ安く生育〻ふ今その報とせぶもあ〻思と
思ふ母めふ似〻る子毎ハ大ら〻る〻かと乳汁ハ今ふ餘滴あり〻。緻れバヨく出るか。今宵
政木ら逐電せ〻と人の知〻ぬを幸ひるれせん術あり。と尋思〻く。その暁天ふ心圃の城内ふか
ら来く政木ふ変〻く。和子の臥蓐ふ添乳と。ら〻臥たりけれ。東人御夫婦いへ〻ら〻り。
いへのうち。一家児の奴婢們誰もかも政木ら逐電ま〻ると知〻ま。況和奈三と共侶ふ石神川ふ滾落て
底の水屑ふ〻りふよ〻と後まで生る〻めるけれ。奴家と真の政木ふあ〻ぞと知る〻め絶て〻り
けり。恁而ふの次の年。ふん身の奴々ハ血塊の病着重り〻臥〻より。鍼灸葉餌の效驗る
く。約莫半稔有餘ふく。竟ふ身故りのひふ奴々亡る〻ひ〻より。和子ハいと〻く奴家を墓
ふく。離れ〻ま。放ちもせま。恩愛既ふ庸常る〻〻ねば我実子の思と做〻。守宇むと又二稔
有餘和子の五才ふ〻りぬけ。夏の日の〻ま〻ま紀南向の小坐席ふ奴家ハ和子ふ添乳を去

ぬ。寝るとハ知らず假寝せし折。和子ハ單覚めて。怜悧や稚心にも我面影の異へしを。
怪しと思ひけん。次の間に在しる大人を連りに喚立して。爺々よ是齋せ渡ひて顔ハ狗
児に做り給ひぬ齋せ給よ喃々と喚る聲の。奴家が循耳に入りしかバ駭き覚て一霎時も堪ず。
鈍ましや我ハ我が本形を顕しけりと思へバ。そが侭庭門より走去りて。竟に還らざれども別の悲し
さ日の暮るまで前栽なる樹蔭に躱れて泣く在り。守如大人も件の奇異を齋しぬれバ。
驚きし怪ともなく大くならざれ。原来政木ハ野狐なりしと。その年来知ずして我子と字育せしを悔
ませけれバ。この只ならぬ人知らバ武士なるものが畜生の乳をもてその子を育てけりと。いはれんハ此上なき羞
なり。秘よ口外すべからずと奴婢們を堅しく警めて。その明の日に政木が保人某乙を召よせて。昨
日政木ハ逐電をせり。然とて別に犯せる事なり。往方を索て見ずしてかねて来よと言示して。
その餘の咎に及ばず。和子ハ五才になりまでハ嫡母なくてもあるべしとて。老女を守に隷はしむ。久後
我子の與なればとて。人薦れども後妻を娶らず鰥夫で在しなり。かの程にその年比より奥に隷の

老黨某丙病死しけれバ。扇谷殿守如をもて。其迹役に成しぬ。是よりの守如大人ハ五
十子の城に召れて那首に移り住ぬ。へバ奴家ハ悄々にも和子を見まく欲するに路近からねバ思
ふに儘ならず不娯しき涯りなりしかバ。忍圖を立去りて上野の原に獨居り。この時奴家なほ
なり。身ハ幸ひに命長くて数百年を歴たれども靈氣なきバ功徳なけれバ通力も亦疎なく。
牡ハ残忍の人に殺され。我ハ幾程もなくしてその怨を復さず折譴したるのもと下されて和奈三
政木を害せしにあらず。遮莫不良の人とても世に萬物の靈也とし。ましてや身ハ畜生にて仇とし
謀られて。騰、死地に陥れしハ人畜尊卑の差別を思はず。對応の義をもてしなば我術ハあら
ざらんや。然バ神にも佛にも憎るべきハ我身にて。天の冥罰怕るべし。悠きぞ罪障重けれバ。今より
幾層の功徳を積て世の為又人の與に慈善を旨とせばもあらぬ志願成就の日ハあらじと深
念の脇を固めたりける。なる程に這上野の原にハ昔よりして人憩ひし出茶屋なンどもあらざりけれバ
三伏の最熱しき日又玄冬の寒けき時にハ旅客寒暑に堪難て死に至るものあるになるぞ。

故に奴家の老媼に変りて這里に茶店を置き、往復の人の便りを待ちて、年来に渡りて、けり。然れば日毎に獲る茶銭にて、乞児或い寒民の餓えを施し、又這頭の溝壑梁の朽損ねたる家屋を買い、奴家悄地に獨木を架し、人の便宜を設け、或い男女の情死を制する意見を加え、慈を諭して、故へ收めしも、甚だ貧困極まって、縊れんと欲する者、身を淵川に投んとする者、救ふて、銭を取らず、且生活の便宜副論えて、宅養と養育を轉じて、歡びと做す。もはや、奴家が這陰徳を思ひ起こしたるその日より、今に迫て二十許年、人の必死を救ひ、九百九十九名に達せり。その義天意に稱ひ、故狐身毛年々に白く変じて、清雪の像、尾も亦裂て九尾に変ずる世の人、九尾の狐と呼ぶ近世の似而非物語、玉藻前の事とて、皆悪狐なりと思ふ。されど、并に甚だ訛舛なり。九尾の狐、神獣、又九星狐と稱せらるる瑞應編に明文あり。段成式が酉陽雑俎に天狐とのひ、九尾あり。日月宮に来往して、陰陽洞達して、千里外の事を知る天眼通を得たるものも、奴家も修行の功徳に因て、稍その數に入る。

白毛九尾の形を備へ、天眼通を得たり。身の咎々守如大人、今慈正月廿一日に免れ、死尼あり。折奴家その義を知るを、救いまゐらせ、思ひ、命數既に涯りある定業なるを、爭何いせん。本意を、ぞとのごとく、不娯に、又、身さへ奸黨の妻母悪詐中られて、冤屈の罪に死を促され、白刃頭に位に至れり。今日我和子の死を救ひ、奶の慈恩に報いぶ、始めて、終に、年来、做す、我陰徳も、空しからんと、思ふ。這頭に、ヨリ、眷属の野狐と、呂聚合て、計畧を、説示し、奴家に、即、越後の長尾家の老丈人、般殿の身を、変じ、眷属に、百十數個の伴、當に、打扮して、根角谷中に、仏を、思ふ。輒く、九尾の身を、救ふ、因縁、都て、かくの如し。然れば、年来、人の死を、救ひ、數に、九百、あまり、今、一人、千に、満ぬ。志願成就のけふの折に、昔字育まれる、和子を、救ふ、舊恩に、報ぬ。一事両用と、秋、悔めば、苦る長談、久話を、孝嗣、つらく、聞て、果て、感涙、坐に、吃むまでに、一霎時、啓沼ぶりを、思ひ、つつ、嘆賞して、通微妙に、汝の、方便、嚮に、もひ、とる

かく我総角なりし比、親に聴る汝の事もし。故なく逐電して往方は今に知れずとのみ思ひたりしに。思ひきや、その身は非人異類にて、賢人貞女も及ざるべき陰徳善行、我與に再生の恩あれば、其母亡母の慈善の餘徳、世に復るべき幸なる所と稱えて、感謝に堪ざりし。悦び涯りなかりけり。その時までも親兵衛は、只顧頭を低て黙然として在りけるが、徐に貌を更めて政木狐にうち向ひて、物千載を有ちぬれば、神に通して霊ある多かり。和漢に例多かれど、汝が命長かるも亦怪むに足らねども、その身既に一千年の長寿に迨ぶ霊狐なるが、且裏に河鯉の家の貴子の下にく。子を産める其比は九百八十許歳なるべし。縦その身は異類なりとも、物老ぬれば経紅竭く。有身る事有べからん。然も有りしはあやしくてと詰るを、政木は聴あへず、そは宣なる事ながら、約莫天地の清気に稱ふ長寿を有ち得るものは、その身老て亦又婉に回り、百歳毎に血気復して、情慾も亦始に異ならず。さればこそ奴家は、連添ふ雄狐の老て死去れば、又外より夫贅を招て来由るも十をもて数ふべし。抑狐は陰類にて群居せざるものなれば、只牝牡と棲るのみ。この故に唐山

ゆゑに文字になぞらへて孤に為れり。狐は即孤の義にして群居ざるのよしを取れり。是は要なき教言にして、汝が身の辯は、釈迦に説経、孔子に語道するに似たらんかし。とうち咲て吻々とうち笑へば、親兵衛屡頷頭て、その義は既に知る所なれども、然らば又問試ん。汝は雄狐の死せし比より、霊狐の田地に入るとて、欲する情を割て慾を禁め、慈善を旨とせしといへば、後暗き行ひは無るべし。然るに河鯉生を救んとて、さまざまに形貌を変化して谷中二们を愚弄せしは、是機変の術にあらずや。機変は神仏の憎む所事に邪魔の入る所以は、隠慝機変の応報にて、恐慎むべき事ならずや。霊狐の所行に似げなきぞ。也、且汝が河鯉生に贈りたる両刀は、原河鯉の什物なれども、既に没官せられしを、情地に奪ひたるならずや。其は竊盗の所為に似て、快からぬ所あり。その義も亦是故あるか、と詰れば、政木は笑て、理論は寔に然ることながら、機変も私慾の與にせば甚し。或は世の與、君父の與にせば、行はずもあるべからず。況罪なき因人の枉死を救ひて、一機変は仏説にも善巧方便と称ふ。孔子の教に直を挙て、父は子の為に隠し、子も亦父の為に隠す、直きこと其中に在り、とのたまひし。恩ひ然る奴家が詭計は、恩義の與にて、何ぞ神仏も與し

文溪堂蔵

あらべし。又孝嗣主の両刀は実に没官せられしにあらず根角谷中にて私慾の為に奪はれて収め置するを。
とり復して主に返し進らせんと宿縁ある所なりと似でありしは心に然でも御事安けれども親兵
衛又犬飼頭で耳新なる論弁分明理あるといへども。咱們は及ばずとて誉るを政木を推
て禁めて然るは宜けれど奴家は知れりそれ身は世界に十人ともいふ八犬士の随一人神女の眞助は成長り
ぬる奇童にてあらねども鄰向に聰ひたる析奴家は予て猜しことあり。然ればそれ身の悟は天地の間に
両箇となき仁字の霊玉の凡庸の野狐なる非如長寿を有ちてことも識向のなきと見れぞ
本形の頭をあらはす身は幸ひにもそれは既に霊狐の数に入りければ心にも毫も邪なき其の證據で候
るぞかれどもそれ身の来歴をよりて具に考ぶるに方絶ず不思の池畔にて河鯉腕手に待ぐとある身の
事の顛末を辯ずるもあるを知りていと憑思しく思ふに情地に安房上総なる城隍土神達と称へ
せよ那里の安否を問試ふに又なる異変ありて君身は知らずながら親兵衛を見て
放ちて奇何事ぞ。知らざる快ちもせしね所なくは。と問へば答く然なれども君身が主君の疑

きて猛可に遊歴の暇を賜ひしは素より邪魔の所為なりし。その故は箇様々々と逆将蟇田素藤は
妖尼妙椿が邪助を得て夜館山の城を襲略したるその折城の頭人なる登桐山八良干は生
拘れ田税戸賀九郎逸時と苫屋八郎景能は敵の囲を殺開きて倶に他郷へ走りし事星宗
より里見殿は荒川兵庫助清澄を討隊の大将として。館山の城を攻伐せしめしに妙椿が幻
術にて魔風を起し寄隊を破りて浦安牛助友勝を擒にせらる事。這夜又荒川清
澄は埋兵をもて夜毀めの兇黨礪時願八奥利狼之介們を生拘りしに又妙椿が幻
術をもて件の三賊を騙略せし事。その後荒磯南弥六ら安西出来介と情地に謀りて。親兵衛
素藤を刺んとて敵城に入りて戦殺せし事。その比又里見殿は早晩に土中に埋措せし
が仁字の玉を清澄に貸んとて穿出させたまひしに。甕のみありて玉のなければ。後に始て惣醒て後
悔の心ありその比又妙椿は稲村の城に悄来て濱路姫を擒攫ひ走り去んとせし。路を伏姫の
神霊の妙椿を蹴仆し姫を救ひて一霎時富山にわれて。妙椿が夕妖書のなる仮名の名のが

冤魂の事。親兵衛は一言も行ることなくして那妙椿が幻術とりそ里見殿ふ疑せて所の事の顛末を具ふ告ぐ。稲村へかへ遣りのぐべ里見殿よりを聞ゆる。慚愧後悔大くさうぞ。蜑崎十一郎照文と蛇雪與四郎們を使として。快親兵衛と召かへて素藤妙椿們を對治せべく。その折をもて餘の七犬士の在処をも尋ねそ共侶ふ招ぎ集合んと欲ーゆ。評議區々なりける。瀧田の城内ふも鶏鳴の奇異あり。老侯那意を精ーゆ。道則照文と與四郎を稲村の城へ遣ーのぐべ君臣ふく便宜をなく照文と與四郎は君侯の仰と奉り去向と異かー。船路より猛可ふ起行ー事の趣ふの餘一事も洩漏なくその崖略を解示して。蜑崎蛇雪両個の使价の稲村の城を立去りて便宜の浦より船出をあけれ遠くもあらず。昨日のうへふの笑ゆらろるゆゆと生る詞の委を見て辯舌水の流るごとく疑ぶもあらばれ親兵衛は欲ーゆふ憶も膝を拍鳴ーく。奇ん妙ん汝の恵告倘ふの言を聞ざりせば我は他郷と偏歴りて再叛の賊素藤們を討捕る便りをーんふ思ひけるを幸ゆるなと連りふ稱ゑく已ざりけり。

第百十七回

恩ふ答く化龍升天を示せ
津を向く犬童風濤ふ惱む

登時犬江親兵衛は孝嗣ふうち向ひく河鯉主今聞れーどく上總ふ亦復賊乱あり。腹立ーれは館山なる三番士們ら阿容々々と。果敢なく城と攻陷される。一個は敵ふ生拘らる。両個は逃るる不覚さよ。又教ーれは我君のあん疑ひを解せられ忌ふ仁を召かへて。又素藤と伐せんと欲りーゆふと聞ゆるなの一條は面目あり畢竟我身の枉危は妙椿とふ妖尼の幻術より出ーるを我思慮淺くて今まで悟ーゑ又我犯ふ罪ふ及ぶとを解れて君侯の醒めひーを伏姫神の冥助なると是ふ至りく肇て知れり。唱們富山ふ在りーー日は伏姫神の示現ふ知りて知ざるとのなりーふ始め劣まる我智と思へば憑心むい仁字の靈玉のう曩裏ふ自然と土中と出て我懐ふ入りけるを訴まるふ由なくて影護く思ひーふ开も那瓶を發れく。無りーーとと知召るべ異日稟ー解くふ證據あり。袷とい恰と云造化の默契妙なるかな。遮莫素藤ふ復

叛逆と知るもあるべさて已ん今その事と聞るから稲村ようの兄使蜜崎姥雪们ふ沿逢ひども
主君、館山ふ赴き。兇徒を送るく討捕るべ。若ら彼れが為る比素藤を因忍殺の折東の里が
意見と演て死刑を薦め稟ゐ。ふ酒家単その議を否て素藤復叛くとあらば人ゐい
借らぞ小臣が立地ふ誅戮せべと稟ゐ。よろ我君も憑。く思食けるふ組諂せと人ふいハ
まもせん我も亦始より素藤が復叛人と思いざり。ふあるねども。饒もまに逆賊を誅させ
ゐ殘ふ克ん。迺主家長久の基を固うせん為め。伏姫神の訓ふ繇れり。幷を世の人ハ思ひ
あく。君侯ハ。親兵衛さへ那妖尼ふ方寸と狂される似而非仁政をと今ゆう誚ふも
さぞあらん。人们ハ仁者の真面目をよくも弘あらぬ臆談ふれば。歯ふ拱るふ足されども恩と思ひで
再叛逆。素藤ら悖逆ハその罪先度の類ふあるを曩ふ那奴と誅せばりーハ悪木ようとも。
花開く梢ふ斧と入ざる仁者の心再度ふ至て饒さるハ放く山へ還ゐ。虎の人と咲ひと
屠るふ同じ仁者とふとも忍ぶべらぬ。縦素藤先度ふ倍ーく幾千百人肩籠るとも又

活るく捉んの。嚢の物を探るよう易ようの。和殿一臂の力と勤まる。義侠の意あるるべ。
卒ゆへ伴ふべ。とふられて孝嗣一談ふ及ぶ。適要ある辨才智男金五成を言毎ふ感服せ
とふとるー。小生既ふ知己の資と仰ぎ進退を儘んと欲も火を踏み水ふ没るとても従さんや。
倶ーゆへと慌ゆ。政木ハ推禁ゆ又親兵衛ふちち向ひく。喃犬江主従ふ兵卒ようるとも。
身那里ふ到りゆく。素藤们ハ先度ふ懲りてゆと生き者ようんが。妙椿ハ同ふ。他も亦
霊玉ふ怕れて敵するといるくとも影を躲ー跡を埋めて風ふ烟の滅るが如く忽然とーく逃
亡るハ智男も施き所あるべ。又妖獣と送ゆとあるんん這義を思ひあるとと心屬れば。親
兵衛ハ答難く沈吟て現いるれハ。是ふ尓ようる。壁言ハ三面六臂月もあれ目ふ。ふ面る敵る
らば。敷る捕るとあかくもあるべ。他倘五道の術ようとまてんえまるりゆ。ば爭何ハせん幷ゆ禁る術
るるべやと。問へば政木ハ點頭て。然ばとよその。れオも不才も人ハ各沿るゆあり。得ざる事ゐ。
その故ふ孔子聖人の鋤壊る技ハも。老圃ふ問へと宣へり。ん身ふ助言ハ烏許るべら。

龍の路ハ蛇こそ知〳〵め那妙椿ぞ幻術と破り〻楠捕まく欲せば先他が来歴出処と具ふ知ぎいあるべ〻ぎとふ親兵衛欽びく。そを亦ぶ〻ぶ珠説ぶ〻ん快ぎく聴まく欲ーけれと忘て膝と找れば孝嗣も亦うち合笑れて俱ふ耳をそ傾ける。登時政木い殻耳を低めて。然ぶ〻ば又一條の昔話と志べてん犬江主ハ豫より偖ぶ〻ぶと思ひ合ーぬふ〻も伝〻ま。抑安房國長挾郡富山の禁麓より程遠〻ぬ村落ふ犬懸と唤做ま寒村ありその村這名と沼ざりー以前文安四年。丁卯の秋伏姫七歳ふ〻ぶ〻ぬ〻ぶ比件の村ふ貪ーぬ民の字と技平と唤ぶ〻ぶ。年来畜ける牝狗ありけり這秋その狗児子を産けるふ只一隻子〻〻牡狗〻生れていまゞ幾日も歴ざりー。有一宵その母狗い狼ふ咬れてけり。雛狗いまゞ目だふ開ぶ〻ぶ蒙〻〻る比ぶれば養ふ〻ぶもあ〻ぶりーふ奇ーぬハ夜毎ふ牝狸の富山の方より出て来て乳とりて雛狗と孚ーぶ餓も死ざるとぶ沼そ最大ぬく〻ぶ一時この事ぶ聞て瀧田へ徴れ義実主ハ寵養せーれー八房の犬即是ぶ。去〻ぶ件の八房ハ毒婦玉梓ぶ後身ぶ

まぶ里見ふ害あるべ〻ぶ。役行者の利益ふ〻玉梓ぶ悪霊ぬ終ふ解脱ーぬ八房の犬も亦伏姫讀経の功徳ふよりて。倶ふ苦提ふ入るめ〻ぶ。初八房の犬と孚ーぶ狸児ふも亦玉梓の餘怨冥縁り〻りけるぶ是のこいまゞ得脱せ今も里見殿と怨めるふ〻ぶ当初義実主八房の犬と見ぬ〻ぶ折狸児の乳をりく養れる。事怎々と听ぬ〻ぶて字書ふ狸ハ大ふ役ぬ里ふ役ふ者ぶれば。ぶ〻ぶ是里見の犬ぶ〻ぶ因縁ありと宣ひふ只犬ぶ〻ぶ鍾愛ーて。狸の事ハ竟ふ問れぬ。狸児ハ亦その功をりて。狐のごく禿祠を造り〻ぶ祭らまえと思ひふ然ぶ沙汰ぶれば喫醋ふ堪ぬ。ぶ〻ぶ程遠〻ぬ諏訪の神の社頭ぶ老樟樹の虚ふ栖ひく。那里ふ在ると三十餘年便宜もあ〻ぶ國主御父子ふ崇と做さえと思ひ〻ハ玉梓ぶ餘怨ふ惹ぶ〻ぶ。是宿因の悪心ぶ〻ぶ。怎而草蚕田素藤ぶ両個の愛妾と喪ひく〻ぶ哀慕鬱悒ふ堪ざりー。折他いその虚ふ溝入ぶ〻ぶ八百比丘尼の綽號と冒ーく。妙椿とふ女僧ふ変化ー遂ふ素藤と興誘ーぶ非

兄弟の分の婚姻整ひ。素藤酷く國王を恨みて。叛逆籠城両度に亘ぶ。今日に迫まるを。
[illegible]初妙椿狸児。神女の威霊を憚りて。軍陣の位ざりしに素藤が死を饒さ
ずして。遠く追放せられし後。妙椿いよ〳〵我妙椿りて義成主と大江の胸を狂して素藤
らが[illegible]を殺さんと。実に孤の説誘りしと。素藤が[illegible]いはもありけるを。思ふに慈善を
身の慈善と因を。せ[illegible]吭下過ぎて。熟ふ徴りぶる。幷に小人の本性を。國の安危を定るを。
最も大事の所行なるに。良将勇士がらふ。胆を鬼と妖怪に奪はるゝ。君子
とが欺くべし。陷るべきを。恬なる王をあらざるべしと。奴家が思ひ侮るか。然ば又妙椿が那反間の
邪術をもて。身を他郷へ退けしより。敢又憚らぬ。兇徒の軍師を做して。寄隊を破
る風を起して。沙を飛し。樹を覆せる勢に。當るべからず。嘯く虎より烈しかりしに。是も亦
然り所以あり。他に[illegible]龍袋の玉を持てる。その玉に貉の腹より頭れ出る。宝貝を上古垂仁天皇の
[illegible]時丹波國氷田郡の人と。[illegible]。[illegible]龍袋が家に飼ける犬の名を足往と唱へ。[illegible]

這犬一日貉を見て。立地に噬殺せし。その貉の腹内に八尺瓊の勾玉ありけり。[illegible]龍袋がこの
よを。許禀して。玉を朝廷に獻りぬ。這玉今に石上の神宮にありと。書紀垂仁紀に載
られる。垂仁帝の[illegible]時より。今[illegible]文明十五年に至て。千二百許年。世に戰國にあり。悲しきよ。
[illegible]る珍奇の神宝も。馬蹄の塵に埋まれて。有と知る人稀なりしに。妙椿狸児が見出て。
只顧愛玩秘蔵せり。初[illegible]龍袋が垂仁帝へ獻りける東西の名つけ。[illegible]龍袋の玉と
貉と狸い等類少。穴居して雨を避け。よく風を知る者なれば。昔も今もその皮を鍛匠の
吹革に用ひる。風を生ずの理によりて。妙椿件の玉を。ひそかに呪文を唱て。勁風を起すに極めて效
験あり。遊莫那身い貉に等しき狸児。[illegible]足往の犬に殺されけるに。貉の腹
より出る玉なり。賊徒を資け。寄隊を破る。宝貝に表はれ。後竟に大士に對治せらるべき兆を
悟らずや。宜に嗚呼の所行かな。然ば狸児いその智浅くて野狐に及ざるを。是なる由にも知
られ侍り。[illegible]身他を對治せ。件の玉を獲ぬ。後に必用るとあり。[illegible]等閑にあらざるべし。妙椿

られ給ふ者なれば、初の度とも同じかたに非如ん身の武
が来歴出処の崖畧を伝へ、扨又舘山の城まうち入るゐ初の度とも同じかたに非如ん身の武
勇をあらく素藤们ハ緝捕易くとも、毎く妙椿ハ少知られて他と走らーゑが爭何いせん徒
れば敵ハ知らせぎーく情入るを妙とまべ。その折悄入るべき地方ハ舘山の城の副門ハ固様々の
目標あり。其処ハ昔の城主が地道を造為る一條の脱路へ後ハ千曳の石とのて前後の
口を塞ぎたり。今ハ開を知れる人罕べ。ゑ身が萬夫の旅力あるも、今を除くを容易かるべ。其首
より入らんと欲する折ハ固様々ハ微ぬ毫も筋力を用ひぎーく。出入極めて隨意なる
ん。先後堂ハ走りて妙椿狸児を撞見ーゆる。力もなく征ぎくるその折ハ箇様々々徒ハ
微ーゆる。妙椿が邪術忽地ハ破れて他が腹心ハ黄縁なる玉梓が餘魂解脱せん然りとハい
妙椿が摠身朽木の倒るゝ像く本形をあらはべ。則是玉梓が臨終の悪念塵も住めも。
煙の似く滅亡て後々までも出来るハ見えの證据なんか。併役行者の利益ハ憑れるよも
あらん。實助を仰ぎべかー。その餘のゆい告ぎとも。ゑん身の智計武男のく功あらんと疑ひ

ぎ親兵衛うち听て且感ー且驚ハ勇氣日屬ハ弥増る。腕を憶ぎ扼りて寔ハ有縁の
忠告。よく機を査ー隱微を明ぎ言皆意表ハ出ると听く我身ハ今を富山ハ在りて伏姫
神の示現教諭を業るハ異ゑ者。老媼ハ素是異類とハいとも。その智廣大菩薩ハ。
ゑゝ趣をゑるゑ。謹て明教ハ従ぎらんや。役べーとハいハ又孝嗣も政木の老媼ハうち向ひて。
具る敵地の案内側聞せー我も亦大江主ハ役ふて千里を走る蒼蠅の驥尾ハ附くす功
わらべ又かつ来て慰ん密華少の程を笑ねかーとハいも政木ハ少あぎ否とよ奴家ハ年来の陰德の
功課ハよりく天帝の因恩教を業りけるより狐龍ハ微り伝れば今升天ーく下界ハ在らぎ。
遇ゑを別の時を待れと告るを孝嗣ゑゑるぎ什麼狐龍とハ何ぞのものぞ狐も龍ハ微ら
るやと問へば又親兵衛も俱ハ眉根をとち顰ぎ我聞く龍ハ神物を和漢今昔世の人々
その名を知れども形を見ぎ然るを唐山の史傳ハ昔秦龍氏ハ龍を畜り后羿龍を射るの
説ゆ是をもて抱朴子ハ蛇龍とハ一種ゆ。蛇も千載を歴ぎるものハ化て龍ハ微るとハれ

と陸佃が埤雅その非を辨ぜり。龍いかづちに蛇化して傚れるは真龍なり。
者を亦稱て龍といふ。僻言なりといふ因て我仁按ずるに(の人の龍といひ)素より是二
物あり星を龍と馬を亦龍と稱へ蛟虬蛇蜥蜴ともいふ。倣れば種類多けれども真の龍と
真の龍とは猛星氣と云ふ庶物論形狀ありて。飲食するものあれば天地陰
陽二氣の升降雲と起り雨と降り。春見れて冬蟄む是を名づけて龍と云和名抄豆と
起の義なり二氣の發起を取れるなり然るに世に龍といふは蛟虬蛇蜥蜴などの種類
の中真の龍あれども蛟虬頻蛇の老たるは形狀画る龍に似たる是なれば真の
龍なれども化して龍に傚ふとのみ據るなり化して龍に成ると說いて
酒家寡聞なる人は知ることを具に教へ給ふと問へば政水は點頭て現真龍なる說は
古人未發の明辨なり。学者の惑を醒まし足れり奴家は龍といへりしは名は同じくして物異
真の龍に化ねども陰陽二氣に從ふて雲を召び雨を行ふ然るに狐は

その形狀毫も龍に似ざれとて狐龍の說を疑ひ憚りなく親を信て疎を非とする
ふ事なり壁言の田鼠と如鳥とは禽獸の差別ありて狀も大に異なれども田鼠化して如鳥する
ると月令に見えたり又朽木と螢火とは非情有情の差別あり形の似るべきもあらざれど腐
草化して螢になるとは狐龍も亦これと同じ證文あるを讀むべし狐鳥許多ありけれど所謂
は徐ろに喚起て按ずるに奇事記に白驩山の下に一白狐有りて常に山下を驚撓せり人
祛除を能はざりしに唐の乾符の年其白狐忽一日温泉に浴て自沿まるれども須臾の間に
雲蒸し霧湧て狐は則白龍に化して天に升て去り忽後に陰晴折山本の人
白龍の山畔を飛騰るを見たり如此る事三年にして忽一老父あり臨夜毎に山の
前に哭けり人伺て故を問へば老父答て我狐龍死に故に哭く介と云ふ何を狐
龍と云や老父は亦何の故に夜毎に出て哭くやと問へば老父答て狐龍は我の身狐にして
化して龍に成りぬるを化して三年にして必死を我は狐龍の子と云ふ其人又問て狐龍何

どて能化ーく。龍ゐられるをとゝへ。老父答て。此狐ハ西方の生れ乳を禀て生れり。因て全身白色
なり。衆と遊ぶを近處の狐と居ゝを驪山の下ゐ託ると千餘年後ゐ偶雌龍と合へり。上
天これを知ゝく遂ゐ命ーて龍ゐ為せり。亦猶人間の凡夫より聖人ゐ成るをゝ如且と言訖て滅
失と諸記の隨誦る聲。清亮ゐーく跌ゝを理義分明ゐ侍えけり。

作者曰狐龍の事ハ格致鏡原巻の八十八獸類狐怪の部ゆも。又奇事記と援て
これを載ゝり。作者の他り設けーゐわゝを昔より和漢の博士龍を辨ずる者ヨゝれども。
ゞ狐龍ゐ及ゝるを見ず故ゐそゝ借用ゝ看官原文を知るもゆゝ亦復これと合ーー見るべし。

登時犬江親兵衛ハ孝嗣と共伯ゐほゝくと所果ゝ。且羞且然びと政木の老媼ゐ演ゝ
ゐやゝ。賢者ハ一字の師をゞゐ。ゝ用ゐ思ゝとゝ。汝ハ素是異類ゐーゝ。博識視聽を
驚せり。我ゝく及ぶ所ゐあゝず。ゝゝゐ又逢ゐ甘もゆゝ詞敵ゐせゝくほーゐゐ今遇ゐて今別
れ別れゝ遇ゐゝ今と守ゝく薄緣ゝそゝと慨ーけれと不堪れ俱ゐ孝嗣も愀然と嗟歎

して昔い娘母假ゐも主從ゐハ又我再生の恩人とのゝ思ひゐるその然びも。ゐゐゝゝも盡
ゝく盡る値遇の緣留め難ゝ哀別の涙の雨ゐ雲を召ぶ龍ゐその身を做ーー果ゝ千
さゝ尋底成き大洋ゐ潛るゐ後長ゝゝゐ命ゝ三稔ゐ終るまで尚ゝ忘れぎゐ春秋の折々毎ゐ
訪來ゝーー悲ーゐゐゐとゝ歎けば政木ハゐゝで慰難ゝ。一雫時目水ゐ洗ゝ衣の袖と斂
めゝ。ゐゐ嘯和子女ゝーゐとゝ宜ひゝ非如奴家ハ在ゝゐゝも犬江主ゐ從ゐゝ。ゐ七個の
俊傑と友垣結び幇助ゝゐゝ。仁義德澤世ゐ稀る。那明君ゐ仕へゐひゝゐ名淺竹
簿ゐ誌されゝゐゝ。家ゝ與ーゐハ今ゐゝーゝ三稔の後上總國夷灣郡雜色村ゐ石
降りゝ。石の形ハ蟠る龍ゐ似ゝるゝ見ゐゝ。我成る果と知りゐゝ願ゐハ大江親兵衛
主儘ーゐれる和子の上直ゐれ過ゐゝ。向胆の心足らぎハ幾番も叱り懲ーゝ杖とゝり
看ゐもゝりて武夫の方ゐ道すゐゐハ今ハ時來名殘惜ーゐゝとゝり外面へ走り
出ハ、松枝ゐゐを拽け肉りと立狹と見れば蜚鳥の似く身と翔らーゝ。程近ゝゝゐ不刃心の

文溪堂蔵

池へ炎と跳入りける時に雲湧き雨降そそぎ急風天地を裏して黒白を別ち震動
雷電常間に似くるそが中に龍火の光を向上れば白龍雲間に顕れて首を伸し尾を
無れ。巻を騰る池水の雨と降り白く疾き勢ひに蓮葉断離れ細鱗放下されて
足下に踊るもヨロヨロけり。あの折親兵衛と孝嗣い狂風暴雨に老媼が茶店を怒責
発現茶器もくぐも東西一箇もなく吹攫れ雨を避るに術なければ松の樹蔭に身を
倚せて俱に雷霆を怒るを一滴ぐも降
ざりければ幸ひわく濡もせず衣も濕吹氣を受ざれども亦狐龍のあらあらしての所行を
べーと感嘆ぬ。雙立く在りける程に姑且くく雲歛り雨歇て風雷餘波もくなりぐ長
紀四月の天晴亨て夕陽西に尚残る然ば親兵衛も孝嗣も狐龍の奇特に疑ひ釋て
迭に他が噂をあく路の乾くを等程に親兵衛傍をあくへて嘶河鯉生剛大化龍の升
天を覩く思合る事ども昔年嘉吉の間戦破れく結城の城郭没落の折我老

侯義實朝臣當時に尚弱冠ゆく里見又太郎と喚れぬ〻ぐ送訓に従ひ九死を免れ
氏元貞幼主従五騎安房を投て走りぬる程に落城より第三日の黄昏時侯相模
国御浦郡笞採の浦に船を討めく津を急ぎぬ〻折白龍海底より顕れ出て南を
去く騰り去れり。恁る祥瑞あれば義実安房に赴ぬ〻ぐ幾日もあらずして神
餘が與に義兵を聚合て逆臣山下定包を誅戮。その後朝夷郡平館の麻呂小五
郎兵衛信時が約に背ぬを討夷げ最後に安房郡舘山の城主なる安西景連と戰
克て景連頭顱を授けーより義実安房を平均ーく四郡の主にありぬ〻ぬ這一條の
舊話に酒家富山に在ーー時伏姫神の示現によりて粗知るとぞ云るあり有恁に今
我〻に孝嗣和殿に舊縁ある狐龍の升天を目擊きぬ且その龍を辨論ぬけるも
新舊君臣一致のあど。且義実朝臣の笞採の浦ゆく龍の升天をえぬ〻いき嘉吉元
年四月十八日の夕と狹ぬ又我〻が狐龍を見ーー今日文明十五年四月中の二日なり。

その日は聊違へども共に中旬をその月は是同じ支の暗合なるべし。昔年我老侯の討滅
去ぬひける安西三郎大夫景連は安房の舘山の城主なりし今は愚臣犬江親兵衛が討
果さまく欲しる叛賊蟇田素藤は上総國夷灘なる舘山の城に在り。安房と上総
と異なれども共に舘山と唱へ做したる城の名も亦同じ。祫と思ひ恰をあなひ造化の照對あるに
似たり。事吉兆とまをすべし。欲西國河まで快退りく。船を央て上總へ渡れ和殿の意見
甚麼そやと問へば孝嗣再説に及ばず。聞くがごとの前後同瑞討論合考寔にあり。這
回も大功疑ひなし。卒ぬ倶にそんとく東を投してを立ける。小程に犬江親兵衛は孝
嗣を相伴ふて西國河原へ赴く程に那里は兩の岸さうける狹大地は乾る隨に歩
運びに障りなければ思ひしよりも速く來にけり。故ら日長き四月の天は暮んとしてまだ暮ず躯て
這西國河の岸邊なる。船公の宿所に呼門して佐々と相譚ふに船公答へて上總へいかんと
欲しるぬで只今の風も亦く潮も亦宜しくまを意に這真夜半に必追風ふるべし。波の

上のゆくりも船で世渡る我們まで自由なるべし常なれば急なるとて爭何はせんもんとかまを。
奥に坐席あり。那里で甘坐ぬとの早の商量數年の親兵衛心焦燥て外も船公まを
やと思へば躯て立去る。又孝嗣と共に便宜の出船を主なるに皆のなると相似る困に果に
亦初の長ど宿所へかへる。漁村の柳風に靡いて蓑衣乾き門の夕日影苫屋の煙天に
滅く。友呼ぶ鷗浪に浴き或は芦荻の戰ぐ処魚と踏む白鷺見れ一葉繫ぐ槙の頭
に羽を曝す鵜鴟在り。長汀弓の像く入江に續く浮洲前に似る水澪建り仰ぎて西
南を眺めば夏の富士のまで壯衣と更めぬ遥に東北を省れば翠巒の筑波尚雪殿を殘せり。
武総兩國の都會なれば海船まく猫と卸し商魚那這に軒を比べ世渡り易き福
地なんありける然れば又這河邊に二觀鼻と唱做す岬あり。什麼何ぞ由来ぞと這名
あるやと原るに看官知らぬる所あり。約莫這水際に翹て視るとき右に富士左に筑波前面に
葛西の曠野まで杳渺とて障るものなく只一覽まで五箇の眺望あり。因て土人字して二五

この事
聞鼻と唱へう。鼻ハ即方言也。猶出崎とふごとし。然ばあの出崎ハ千里鏡と貸茶店
あり。飯と酒と鬻く小店もあり。邊鄙ハ似げなく熟鬧しる。折ふし人許ヨリ立取食ふ蟹児の
甘紀ふ附くが像。親兵衛と孝嗣ハ今這出崎を過る程ふ開と那ふやと詠ゆふ。心ともなく立
寄て稠人を極分紀ハ。找ゑ近つゑくよく見るふ主僕とおぼしき老壮両個似而非枝とて人を
立ゑとゑく喜菜と賣まく欲のまる逆旅紀人ゑそありける中ふ年齢六十ゑろるるらん
とゑ思ハ東人ゑ。と〜年歳二十有餘ゑハ従者ゑるべ。王僕俱ふ遠山形ゑ深木綿の夾衣とち
披もて帯をせゑ。白拷の犢鼻褌と高く緊〜引結びて跣足ゑ雙立さゑ地ふ畫〜て土苞ふ
像りそゑ傍ふ天朝捕刀鼻祖野見宿禰家秘神方撲傷折損捐痍妙薬萩野上風相傳
精製と紀ふ。三十言と寫〜ゑ幟形ゑ操紙の招牌を真砂地ふ推植て。ゑ人も寄来ル人ゑ。
畢竟這逆旅紀人恁地ふ人を稠〜く。甚ゑ技を做ゑ。そい次の回ふ解分ると聴ねか。

南總里見八犬傳卷十三之十四終